



Title	古高ドイツ語のキリスト教語彙の構築に対する他言語の影響
Author(s)	四反田, 想
Citation	独語独文学研究年報, 31, 273-288
Issue Date	2004-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26176
Type	bulletin (article)
File Information	31_P273-288.pdf



[Instructions for use](#)

古高ドイツ語のキリスト教語彙の構築に対する他言語の影響

四反田 想

0. はじめに

古高ドイツ語の語彙地理学では、宗教的語彙のレベルでの対立関係が顕著に見られるが、特に教会語彙の相違は、初期中世のキリスト教の様々な布教運動に還元される。¹⁾7世紀のコルムバン Columban, ガルス Gallus らアイルランド人伝道者、8世紀のフランク人伝道者と並んで、8世紀以来、アングロ=サクソン人の伝道者たち、例えばヴィルフリート Wilfried らがフリースランド地方で、ヴィンフリート Winfried がマインツ Mainz, フルダ Fulda で大きな影響を与えた。²⁾アングロ=サクソン語語彙とフランク語語彙間、バイエルン語語彙とゴート語語彙間には共通性が多く、更にこれらの2グループは教会語の語彙レベルで対立関係をなしている。本稿では、古高ドイツ語に与えた、多様なキリスト教伝道運動に基づくゴート語、古アイルランド語、アングロ=サクソン語の影響を、語彙論・意味論のレベルでの言語干渉の観点から考察するものである。³⁾

1. ヨーロッパのキリスト教化における言語史的観点

1.1 古高ドイツ語と古ザクセン語におけるキリスト教語彙の構築に対する影響領域

民衆語としてのドイツ語におけるキリスト教語彙に対する他言語語彙の影響関係は、以下の図表1におけるように要約される。ゾンダーエガー-Sonderregger(2000)によれば、ヨーロッパのキリスト教化によって、ヨーロッパ諸言語間に新たな文化的・宗教的関係のネットワークが成立した。その際、典型的にゲルマン的なキリスト教性や、キリスト教のゲルマン化は存在しなかったとする。⁴⁾初期中世のヨーロッパ社会は、

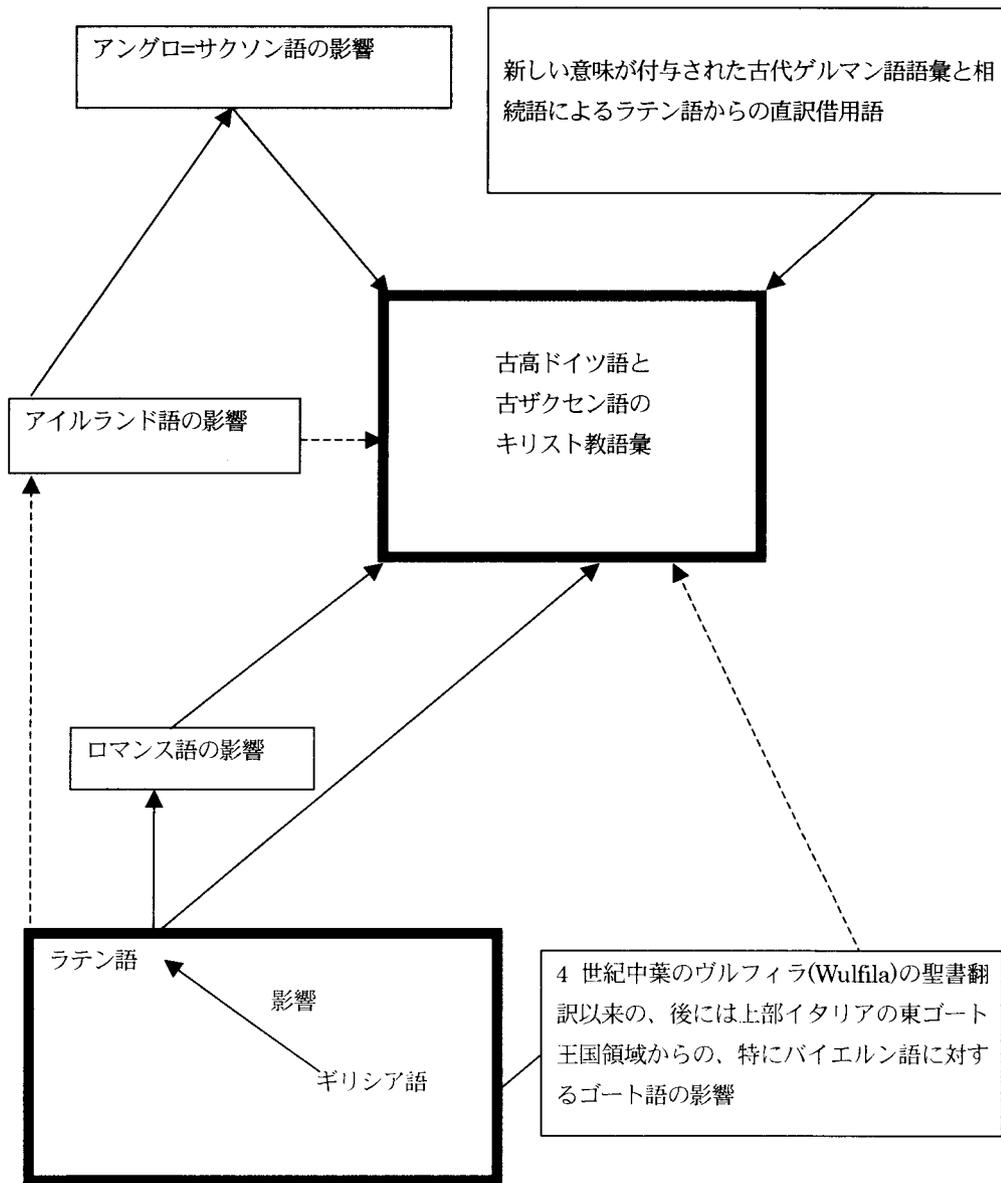
¹⁾ 本論は、拙稿「古高ドイツ語の宗教的語彙における多文化共生 - 古高ドイツ語へのゴート語・古アイルランド語・アングロ=サクソン語の影響関係 -」(原野昇・水田英実・山代宏道・地村彰之・四反田想・大野英志 著『中世ヨーロッパと多文化共生』所収、溪水社、2003年、111-146頁)に加筆・修正したものである。

²⁾ Vgl. König, Werner: *dtv-Atlas zur deutschen Sprache*. München 1996, II. Auflage, S. 69ff.

³⁾ 本稿で使われている諸言語に関する略号は以下の通りである。

abair. 古バイエルン語; ae(ngl). 古英語; air. 古アイルランド語; as. アングロ=サクソン語; ahd. 古高ドイツ語; anord. 古ノルド語; anfr. 古低地フランク語; asächs. 古ザクセン語; bair. バイエルン語; engl. 英語; fries. フリジア語; fränk. フランク語; frühnd. 初期新高ドイツ語; frz. フランス語; germ. ゲルマン語; got. ゴート語; griech. ギリシア語; idg. 印欧語; itali. イタリア語; lat. ラテン語; me. 中期英語; mhd. 中高ドイツ語; mlat. 中世ラテン語; mnd. 中低ドイツ語; mnl. 中世オランダ語; nd. 低地ドイツ語; nfrk. 低地フランク語; nhd. 新高ドイツ語; nl. オランダ語; ofrk. 東フランク語; omd. 東中部ドイツ語; russ. ロシア語; schw. スウェーデン語; spät. 後期ラテン語; vlat. 俗ラテン語。

⁴⁾ Vgl. Sonderregger, Stefan: Sprachgeschichtliche Aspekte der europäischen Christianisierung. In: Besch, Werner et alii (Hrsg.): Sprachgeschichte. 2., vollständig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. 2. Teilband. Walter de Gruyter, Berlin / New York 2000, S. 1048.



図表 1: 古高ドイツ語と古ザクセン語におけるキリスト教語彙の構築に対する影響領域

(Sonderegger 2000, S.1048)

段階的に新しい、ギリシア語・ラテン語、教養と修道院制度から出発した敬虔と精神化の中へと組み込まれていく。それに対応してキリスト教の主要言語と早い時期にキリスト教化した民衆語の影響領域へと向かう語彙の運動も認めることができる。その動きは、地中海の後期ギリシア・ローマ文化圏の影響に連なり、部分的にそれと混交しているが、ギリシア・ラテン・ローマ・ゲルマンの混合した週日名において例証されている通りである。⁵⁾

1.2 民衆語としてのドイツ語におけるキリスト教語彙へのギリシア語・ラテン語の影響

一般的に言えることは、ゲルマン語における新しいキリスト教の語彙は、大部分がラテン語・ギリシア語からの借用語・外来語の受容に基づいていることである。それによって、キリスト教的信仰を背景として、少なくとも西ヨーロッパの、部分的には全ヨーロッパ的な言語接近が遂行され、それは近代にまで影響を及ぼしている。それに対して、古代からのゲルマン語の類義語は、既に早い時期に消滅している。例えば、ラテン語 *lat.*・ギリシア語 *griech.* の *diabolus* (διάβολος「中傷者、悪魔、敵対者」、*itali.* *diavolo*, *frz.* *diable*), ゴート語 *got.* *diabaulus* > ギリシア語 *diabolus* (διάβολος), 中世ラテン語 *m-lat.* の異形 **diuvalus* > ゲルマン語 *germ.* **diufal* > *ahd.* *tiuval* (> *mhd.* *tiuvel* > *nhd.* *Teufel*), *asächs.* *diubal*, *aengl.* *dēofol* (> *nengl.* *devil*) *anord.* *djofull* (*schwed.* *djävul*), 古代教会スラヴ語 *altkirchenslav.* *dijavolŭ* (*russ.* *djavol*) は、ゴート語 *unhulpa*「妖怪、悪魔」、古高ドイツ語 *ahd.* (*alt*) *fiant*, *unholdo*, *widerwarto*, *aengl.* *feond*, *unholda*, *scucca*, *anord.* *andskoti*, *fjandi*, *skelmir*, *uvinr* のような古い相統語の抑圧のもとに受容されてきた。⁶⁾特に西ヨーロッパの「通商語 (リングア・フランカ)」、*lingua franca* (原義「フランク族の言語」としてのラテン語には、重要な機能が付け加わる。ラテン語は、古代高地ドイツ語にとって文章語、聖職者語、古文書語として、また初期における宗教学、世俗文学の多くの翻訳のための起点言語として、まさに規範を形成していた。⁷⁾

2. 古代高地ドイツ語の宗教的語彙について

2.1 概要

古高ドイツ語の語彙地理学の分野では、特に法律語と宗教的語彙の領域での対立が確定される。法律専門用語における相違が古代の部族単位の言語的相違を記録しており、フランク語の表現の優勢にはフランク王国を支配したフランク族の政治的優位が反映されているのに対して、教会語における相違は、様々な伝道・布教活動に由来するとみなすことが可能である。⁸⁾古高ドイツ語の宗教的語彙に対して、以下のように3つの布教活動の影響が見られる。

2.2 南ドイツ語とゴート語の密接な関連

ラテン語が西ヨーロッパの「通商語 (リングア・フランカ、フランク語)」として、古高ドイツ語に対

⁵⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1049f.

⁶⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

⁷⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

⁸⁾ Vgl. König, a.a.O., S. 69.

する規範として非常に重要な役割を果たしたことに一般的な異論は見られないのに対して、最古のゲルマン・アarius派キリスト教からの、ゴート語の、古高ドイツ語（特にバイエルン語とアレマン語）とそれ以外のゲルマン語領域への言語的影響は、多様に評価される傾向にある、とゾンダーエガーは述べている。⁹⁾それは量的な評価の揺れにも言える点で、以前の研究では、最大約20語の語彙がそれに相当すると見なされていたが、近年の研究では、10語前後に減少している。¹⁰⁾また、ゴート語の伝播・影響地域にしても、ドナウ川流域、東ゴート・ランゴバルド・アルプス地域、西ゴート・フランク語地域と、様々に判断が分かれている。ゴート語起源、ゴート語によって媒介された語彙は、次の通りである。¹¹⁾

- lat. papa 「教皇」 ⇔ nhd. Pfaffe < abair. pfaffo 「教区付き司祭」; ahd. pfaffo 「聖職者、司祭」 < (-) got. papa < griech. πάπ(π)ας 「聖職者」
- ags. fulwian (baptize); ahd. touffen, taufen 「洗礼する」 ~ got. dauþjan 「洗礼する」、本来の意味は eintaufen 「潜る、水に浸ける」 = griech. βαπτίζειν に対応している。
- バイエルン方言 bair., より古いアレマン方言 alem. Dult (Fest 「祭り、年越しの祭り」)
< ahd. dult ~ got. dulþs 「宗教的な祭り」 = griech. ἑορτή に対応している。
- ahd. gilouben 「信じる」 ~ got. galaubjan = griech. πιστεύειν; lat. credere
(それ以外の非北欧語 asächs. gilōbian; aeng. geliefan, -lyfan) 基本的意味「信頼を引き起こす」(~ got. galaufs, ahd. giloub 「信頼している」に対応する。)
- ahd. irfullen 「満たす、完成させる」 ~ got. usfulljan = griech. πληροῦν に対応している。
- nhd. Heide < ahd. heida 「異教徒」 ~ 聖書ゴート語 haiþnō 「異教徒の女」 < spätgriech. hetnē (意味論的には germ. got. haiþi 「畑」に依拠している。)
- バイエルン・オーストリア方言 Ertag 「火曜日」 < mhd.(bair.) eri(n)-, erg(e) tac
~ got. *Areins dags 「(軍神) アレス (マルス) の日」
- バイエルン・オーストリア方言 Pfinztag 「木曜日」 < mhd. pfinztac < germ. 借用形成語 *pentdagaz
- ahd. ablāz. m. 「免罪」 ~ got. aflēt n.; aflēts m. = griech. ἄφεσις 「罪、罰、宗教的罪の免除」に対応している。
それ以外の例:
- 南古高ドイツ語に限定: südahd. anst 「恩寵」 ~ got. ansts = griech. χάρις に対応している。
(それ以外はまた「恩寵、喜び、愛」の意、またこの意味では全ゲルマン語に対応する。)
- südahd. wih 「神聖な、聖なる」 ~ got. weihs = griech. ἅγιος
早い時期に消滅した語彙:
- frühahd. nerrendo (truhtin), nerriento 「救済者」; asächs. neriand, neriendo Crist
~ got. nasjands, sa nasjanda = griech. σωτήρ 「救助者、救世主」
- ahd. heilant; asächs. hēliand, aengl. hœlend = lat. salvator の翻訳借用語が、ahd. haltanto, haltare 等と並んでますます一般的に貫徹し、初期新高ドイツ語 frnhd.の時代(1350-1500) まで様々な異形(heyland, behalter 等)が存在

⁹⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053; Eggers, Hans: *Deutsche Sprachgeschichte*. 2 Bde. Band 1. Das Althochdeutsche und das Mittelhochdeutsche. Rowohlt, Reinbeck bei München 1986, S. 149f.

¹⁰⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

¹¹⁾ 以下の語彙は、主として Eggers(1986), König(1996), Sonderegger(2000)に拠る。

していたが、新高ドイツ語、オランダ語では古来の形を持った Heiland として固定化した。¹²⁾

- lat. salus 「救済」 ⇔ ahd. gīnist ~ got. ganiasts

- bair. 方言 Maut (Zoll 「通行税、関税」) > abair. mūta ~ got. mōta

しばしばゴート語の影響が指摘されている初期に受容されたギリシア語からの教会語彙(例: Engel 「天使」, Teufel 「悪魔」)において、ラテン語・ガリア語の媒介の可能性も考えられるが、バイエルン語においては、このケースは当てはまらない。アングロ=サクソンの伝道の影響と平行して、バイエルン地方でのゴート人の布教も指摘されたが、これは歴史的に実証されておらず、アリウス派ゴート・キリスト教の容認も想像し難い。この影響関係は、500 年頃に突然出現したバイエルンの混合民族に見られたゴート・キリスト教徒の民族に還元できるとする説もある。¹³⁾

2.3 古アイルランド語の影響 - ボーデン湖畔地域における 600 年からのアイルランド人

コルムバン Columban は、550 年に南東アイルランドのラインスター-Leinster に生まれ、高名なバンゴール Bangor 修道院で修道士となり、厳格な苦行と規律で教育された。590 年にコルムバンは、バンゴール修道院を出て、12 名の修道士を伴って、フランク王国に巡礼・布教の旅に出ている。まず彼はブルグンド地方に定着し、ルクソウィウム Luxovium (リュケイユ Luxeuil) 修道院を始めとして、幾つかの修道院を建立した。宮廷の非キリスト教的不道徳を非難したため、610 年に追放され、逃亡した後、ボーデン湖畔に辿り着き、ブレーゲンツ Bregenz 地域で伝道活動を行っている。またその後地元の世俗権力と対立し、更にロンバルディア地方に移り、ボッピア Bobbia に修道院を建立した。アリウス派のランゴバルド族や、果てはローマ教皇とも争い、そこで 615 年に没している。中世初期当時の信仰心の強いアイルランド人修道士の典型例とも言える。¹⁴⁾

また既に 6 世紀には、アイルランド修道士フリドルン Fridom が、モーゼル河畔のツェル Zell とコッヘム Cochem の間にあるヘレラ Helera(エラー-Eller)修道院や、ゼッキンゲン Säckingen 近郊のライン川の川中島に修道院を建立したと言われているが、これは実証されていない。8 世紀になると、アイルランド修道士たちによって、721 年に、シュトラースブルク Straßburg 近郊の、同じくラインの川中島であるホーエ・アウエ Hohe Aue に、ホーナウ Honau 修道院が建立される。またその後キリアン Kilian(ヴェルツブルク Würzburg)は、2 人の修道士とともに、689 年に殉教したが、ヴェルツブルクに修道院を建立している。その中でも特筆すべきは、アイルランド人修道士とザンクト・ガレン St.Gallen 修道院との関係であろう。ガルス Gallus(630 没)は、先に述べたコルムバンの随行者の一人であったが、コルムバンがロンバルディア地方に移住した後もブレーゲンツに留まった。ガルスが 630 年にシュタイナハタール Steinachtal の庵で亡くなって以来、彼の庵は一種の崇拜の場所となり、その後アレマン人のアウドマール Audomar (オトマール Otmар)がその場所にザンクト・ガレン修道院を建立した。ザンクト・ガレン修道院には、9 世紀以来、少なくとも 31 写本が“libri scottice scripti”、即ち「アイルランド語で書かれた書物」として現存している。アイルランド人布教活動の影響を強く受けたアウドマール(オトマール)と同様に、数多くのゲルマン人た

¹²⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

¹³⁾ Vgl. König, a.a.O., S. 69.

¹⁴⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 158f.

ちが伝道と修道院建設に努力した。西ゴート人ピルミン Pirmin(753 年没)は、フランク人修道士たちと共に、724 年にボーデン湖畔にライヒェナウ Reichenau 修道院を、また 727 年にはエルザス地方にムルバッハ Murbach 修道院を建立した。またフランク人修道士たちは、8 世紀にはバイエルン地方に最初に修道院を設立している。例えばエンメラム Emmeram (715 年没)はレーゲンスブルク Regensburg に、コルビニアン Corbinian(725 年没)はフライジング Freising に、ルーベルト Rupert(720 年没)はザルツブルク Salzburg に、それぞれ最初の修道院を建立した。ザルツブルク司教ルーベルトの最初の後継者は、アイルランド人のウィルギル Virgil で、非常に厳格で禁欲的な人物であったが、このことから、ゲルマン人が伝道活動の新たな担い手となった後も、この地域での伝道活動がアイルランド人修道士たちと密接に結び付いていたことが伺える。¹⁵⁾ゾンダーエガー(2000)は、古アイルランド語のゲルマン諸語への影響は、個別的に、言語史・語史的なものであったというより、より一般文化史的に、特に布教史・文献史的に効力を発したと指摘している。¹⁶⁾南ドイツ教会語の形成に対して、ケルト語を話すアイルランド人の直接的な影響を例証しようとする試みがあった。古高ドイツ語の *glocca, clocca* (>Glocke 「鐘」)は、古アイルランド語 *air. clocc* (「鈴、鐘」)からの借用語とされている。クルーゲ Kluge(2002)によれば、アイルランドの伝道者たちは当時小さな鈴を携えており、それらは今日でも残されている。¹⁷⁾「手鈴、小さな鈴」の意味から、「大きな教会の鐘」の意味への転移が行われたと見なされている。Eggers(1986)は、今日でもなおアルプス地方の牛の群れが首に掛けている鈴が、長方形(矩形)の断面をしており、その形が古代のアイルランドの鈴に固有のものであることを指摘し、アイルランド人が伝道活動の際に言語だけでなく、事物も移入した例と位置付けている。¹⁸⁾

ゾンダーエガーは、古アイルランド語 *clocc* (「鈴、鐘」)に基づく古高ドイツ語 *glocca, clocca* が、中世ラテン語 *clocca* を経由して、全ての古代ゲルマン諸語に広まったと見なしている。¹⁹⁾これに対してクルーゲでは、古アイルランド語 *cloc(c)* (「鈴、鐘」)が恐らく後期ラテン語 **cuticulare* < *quater* / *excudere* 「振る、叩く、振動させる」に遡るであろうと類推されている。²⁰⁾

air. clocc > *mlat. clocca* > *ahd. glocca, clocca* f. (> *nhd. Glocke* 「鐘」) (cf. *aengl. clugge, clucege* = f. *bell*, BH340⁶⁾)
lat. quater / *excudere* > spätl. **cuticulare* > *air. clocc* > *ahd. glocca, clocca* f.

もうひとつの例は、ラテン語の語彙が古アイルランド語を経由して古高ドイツ語に入った例である。「聖職者」を意味するラテン語の語彙 *clericus* は、古アイルランド語 *clérech* を経て古高ドイツ語 *chlirich* へと受け入れられる。²¹⁾

lat. clericus > *air. clérech*; *clírih* > *ahd. chlirich*

¹⁵⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 159f.

¹⁶⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

¹⁷⁾ Vgl. Kluge, Friedrich: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Bearbeitet von Elmar Seebold. 24., durchgesehene und erweiterte Auflage. Berlin / New York 2002, S. 362.

¹⁸⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 160.

¹⁹⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

²⁰⁾ Vgl. Kluge, a.a.O., S. 362.

²¹⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

レオ・ヴァイスゲルバー Leo Weisgerber は、古アイルランド語の影響について考察し、clericus > 古アイルランド語 clérech; clírih 以外に、アイルランド語の影響、例えばラテン語 poena > アイルランド語 pína (それに属する動詞 pínôn; pfinôn と共に) や、ラテン語 feriae > 古高ドイツ語 fîr(r)a > 中高ドイツ語 vîre > Feier 「祭り」; ラテン語 expensa > 俗ラテン語 spēsa > 古高ドイツ語 spîsa; ラテン語 versus > 古高ドイツ語 fers にも、音韻上の理由から古アイルランド語の関与を見ている。²²⁾

ハンス・エガース Hans Eggers (1986) は、また直訳借用語における古アイルランド語のドイツ語形成に対する影響も、明確に証明できないとしている。²³⁾ 確かに、ラテン語からのアイルランド語への、成分(構成要素)対成分翻訳は、古高ドイツ語へのそれと同じように存在しており、例えばギリシア語起源のラテン語 eu-angelium は古アイルランド語では so-scélae 「良き知らせ」であるが、ライヒェナウでは, cuat-chundida 「良き知らせ」、ザンクト・ガレンでは kuot-ârende 「良き知らせ」となっている。これらは、勿論、教会ラテン語のギリシア語起源に対する理解を前提としており、アイルランド修道士たちがギリシア語(コイネー)も使用できた可能性を示唆している。しかし、ギリシア・ラテン語教会語に関する知識は、他の方法や経路で得られた可能性も排除し切れない。

次に、エガースは、ラテン語からの古高ドイツ語への翻訳の際に、古アイルランド語の影響を受けたと考えられるケースを挙げている。²⁴⁾ それは、ラテン語の語彙 tristis 「悲しい」、tristitia 「悲しみ」、(con-)tristare 「悲しむ」の古高ドイツ語への翻訳に見られる。tristitia は、「神の意思への反抗」、即ちキリスト教徒が犯す最大の罪の一つとされていた。それに対して、アイルランド人布教の中心的影响を受けたアレマン語地域では、古高ドイツ語の翻訳体系に適合しない、異質な翻訳、即ち古高ドイツ語 unfrao, unfrô 「悲しい」(本来の意味は unfroh 「楽しくない」)、unfrawida 「悲しさ」、unfrawen, gaunfrawen 「悲しむ」が現れる。これらの語は、明らかな新造語であり、ラテン語語彙を反対の否定 (Trauer 「悲しみ」= Nichtfreude 「喜びでないこと」) によって再現する方法は、当時の古高ドイツ語翻訳者の翻訳方法に全く反している。というのも、否定の接頭辞を伴わない語彙 morna 「悲しみ」、mornên 「悲しむ」が当時既に使える状態にあったからである。エガースは、新造語によって「悲しみ」の特殊なキリスト教的観点が際立たされ、そのことは古アイルランド人の内面化された敬虔さに完全に対応し、また古アイルランド語の語彙との厳密な一致も見られるとしている。²⁵⁾ tristis は anfáilid (= unfroh) 「楽しくない」; tristitia は an-fáilte (= Unfreude) 「喜びでないこと」によって再現されており、これらの古アイルランド語彙は、古高ドイツ語 unfrao, unfrô, unfrawida と全く同じように形成されている。古高ドイツ語におけるこの例外的な造語は、古アイルランド語語彙に見られる同様な造語法(「喜び」に関する語彙の否定)に依存している可能性が高いと考えられる。

更に古アイルランド語と古高ドイツ語の語彙に、もう一つ的一致が見られる。比較されるべきラテン語の「喜び」を意味する語彙の派生関係は、ラテン語 laetus 「嬉しい」-lactitia 「喜び」-laetari 「喜ぶ」となる。古アイルランド語では、「喜び」に関する語彙は、以下の通りである。まず形容詞 falid 「嬉しい」が形成され、次にこれから名詞 failte 「喜び」、動詞 failtigid 「喜ぶ」が派生・形成される。この派生関係は古高ドイツ語においても同様である。まず形容詞 frao が出発点で、この語から名詞 frawida と動詞 frawen が

²²⁾ Vgl. Weisgerber, Leo: Die Spuren der irischen Mission in der Entwicklung der deutschen Sprache. Rhein. Vjbl. 17, 1952, S. 8-41.

²³⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 161.

²⁴⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 161.

²⁵⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 161f.

派生する。これらの古高ドイツ語の語彙も、南ドイツ地域で成立したと見られ、既に喜びに関する古来の別の語彙が存在しているため、やはり異質な新造語と考えられる。「悲しみ」と「喜び」に関するキリスト教専門用語が重要であったと見られるアイルランド人修道士たちは、古高ドイツ語のこれらの新造語に、自分たち自身の言語の規範に従って影響を与えたと推定できる。しかし、古アイルランドの教会語が十分体系的に研究されていないため、この2つの古アイルランド語ー古高ドイツ語の造語法の一致及び対応関係例から、一般的な推論、即ち古アイルランド語の、古高ドイツ語教会語の形成に対する広範な影響に関する仮説とその検証、を導き出すべきではないであろう。また勿論、古アイルランド語の影響を受ける以前から存在していた、多様な時代と言語的語源から派生した語彙も、南ドイツ教会語には当然存在し、古アイルランド布教期を通じての、ゴート語の言語的な関与が保たれていたことから、アイルランド人聖職者とその関係者たちが、既存の言語遺産であったゴート語語彙を好んで使用したことが推測される。いずれにせよ南ドイツ教会語には、様々な時代の多様な語源の語彙が存在しており、その検証は、特に確実な伝承関係の把握によってのみ可能になる。これらの新造語の背後には、当時のアイルランド人布教者たちによる、特定のキリスト教倫理上の共通に説明された概念内容としての事態を、術語的に確定するために新造語を生み出すという学者グループ内の議論に基づく真摯な学問的営為が想定され、更にそれは、宗教的に深い敬虔さに基づくアイルランド人の布教活動に帰することが可能ではないだろうか。その敬虔なキリスト教倫理に支えられた学問的営為の中に、これらの新造語の成立にアイルランド人布教者と彼らと志を共有する弟子たちが深く関与した内的な理由も見出せるように思われる。²⁶⁾

以上、古アイルランド布教活動と古アイルランド語の影響について述べてきたが、これら少数の例以外の古アイルランド語の古高ドイツ語への確実な影響関係を証明することは、未だにできていない状況である。その一因として、アイルランド人修道士の布教活動において、ラテン語が決定的な役割を果たした点も挙げられる。²⁷⁾ディーター・ベアー Dieter Bähr (2001, S. 20)によれば、古英語でも、ラテン語からの借用の過程は、既に共通ゲルマン語時代から始まっており、近代英語期まで続いている。²⁸⁾その反面で、古英語自体は、ケルト人からの言語的影響はほとんど受けなかったと言われている。ごく少数の地名や、地名の構成要素、借用語にケルト語の影響が見られる。例えば、wir torr 「高い岩」(Torre Abey in Devon), cumb 「谷」(Ilfracombe in Devon)等や、またハイブリッドな異言語間の結合の例として、Helston in Cornwall (ケルト語 henlis 「古い居住地」と古英語 tūn 「町」)が挙げられる。更に、assa 「ロバ」、wealh 「奴隷、よそ者、外来者」等のケルト語からの借用語も存在する。西ノルド語(ノルウェー語、アイスランド語)においても、古アイルランド語からの借用語はわずかであるとされている。

²⁶⁾ Vgl. Reiffenstein, Ingo: *Das Althochdeutsche und die irische Mission im oberdeutschen Raum*. Innsbruck 1958, S. 48ff.; Eggers, a.a.O., S. 162f.; Polenz, Peter von: *Geschichte der deutschen Sprache*. Erweiterte Neubearbeitung der früheren Darstellung von Hans Sperber. 9., überarb. Aufl. Berlin / New York 1978, S. 42f.; Wolff, Gerhart: *Deutsche Sprachgeschichte*. Ein Studienbuch. 2., durchgesehene u. aktualisierte Auflage. Tübingen 1990, S. 56f.; Schmidt, Wilhelm: *Geschichte der deutschen Sprache*. Ein Lehrbuch für das germanistische Studium. 8., völlig überarbeitete Auflage, erarbeitet unter der Leitung von Helmut Langer und Norbert Richard Wolf. Stuttgart / Leipzig 2000, S. 70ff.

²⁷⁾ Vgl. Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

²⁸⁾ Vgl. Bähr, Dieter: *Abriß der englischen Sprachgeschichte*. Wilhelm Fink Verlag, München 2001, S.20f.

2.4 アングロ=サクソン語の影響 - 西ゲルマン語における古高ドイツ語・古ザクセン語・アングロ=サクソン語の関連

最初に、簡単に西ゲルマン語における古高ドイツ語・古ザクセン語・アングロ=サクソン語の関連を説明しておく。約 700 年頃から、他の西ゲルマン語、特に古高ドイツ語・古ザクセン語から離れて、新しい独立した個別言語として、石碑に刻まれ羊皮紙に書かれた「英語」の存在を確定できるようになる。この新たな言語は、それに続く数世紀に絶えず発展し、それから多様な語彙論的・音韻論的・形態論的・統語論的变化を辿ることができた。一般に英語史では約 200 年毎に新たな時代が始まるとされる。西暦 700-900 年の期間は、初期古英語と区分されている。なお、以下の図表 2 は、近代英語 *beam, one, seek* に対応する、西ゲルマン語・古高ドイツ語・古ザクセン語・アングロ=サクソン語の語彙を比較したものである。²⁹⁾

図表 2: 近代英語 *beam, one, seek* の例

*westgerm.	baum	ahd. boum	asächs. bām, boom	AS bēam	ME beam
germ.	*ainaz	ahd. ein	asächs. ēn	AS ān	ME o(on)
germ.	*sōkjan	ahd. suohhan	asächs. sōkian	AS sēcan	ME seken

2.5 8 世紀以降のアングロ=サクソン人伝道者

紀元 700 年頃に、アイルランド人布教活動が最高点に到達した時、アングロ=サクソン人布教者の大陸での布教活動が開始されようとしていた。アングロ=サクソン化したイングランドでは、重要な修道院文化が成立し、教育史的にも文献史的にも、カール大帝の時代を遙かに越えて、ヨーロッパ大陸に影響を及ぼした。ヴィルフリート・フォン・ヨーク Wilfried von York(710 年没)は、678 年ローマ旅行の途上の 678 年に、最初のフリジア人改宗を試みている。³⁰⁾ 彼によって、アングロ=サクソン布教活動の世紀が始まった。彼の布教活動は、ヴィリブルルト Willibrord(657-739 年)によって継続されるが、ヴィリブルルトは 690 年以降、フリジア人への布教に専念し、ユトレヒトを彼の司教座の地に選んだ。これらの先行する布教者よりも持続的な影響を与えたのが、ヴィンフリート Winfried(675-754 年)であり、彼は 719 年にローマ教皇から異教徒への布教とゲルマン諸部族のための教会の組織化の任務を受け、ボニファティウス Bonifatius の名を得た。744 年には彼の建立した修道院の中で最も重要なフルダ修道院を設立し、そこを永遠の住処とした。エガースによれば、多くの修道院の建立と並ぶ、彼の言語史上最大の功績の一つは、東フランク王国領の半分をケルン、トリーア、マインツという 3 つの大司教区に分割した点とされる。それによって大司教区及びその内部の各司教区は交通・通商共同体を形成し、その中で言語上の特殊な発展がなされた結果、その境界が方言境界として機能するようになった、という仮説である。³¹⁾ このように、7 世紀後半から 9 世紀初頭にかけて、ユトレヒト Utrecht, エヒテルナハ Echternach, フルダ, ヴェルツブルク, マインツ等の中心地やその北西部・北東部への放射地域を越えて、アングロ=サクソン人の布教修道士、修道

²⁹⁾ Vgl. Bähr, a.a.O., S.18.

³⁰⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 163.

³¹⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 164.

院設立者、司教らによる、古高ドイツ語と古サクソン語に対する特別な影響が見られた。³²⁾その際に、語彙における敬虔さの深化が問題となり、しばしば古英語の規範に従った形で、意味論的な変形が生じた。よく引用される例であるが、ahd. heilag は、古英語 hālig からの影響を受けている。(nhd. heilig < ahd. heilag, asächs. hēlag < aengl. hālig) また、ahd. geist は、spiritus sanctus 「聖霊」を翻訳する際に、古英語の se hālgā gāst に倣って古高ドイツ語では der heilago geist という形になり、ahd. ōdmuoti, ōdmuatig, asächs. ōdmōdi (humilitas, humilis) > aengl. ēadmōd 「謙虚な」とされる。³³⁾

2.6 アングロ=サクソン語 Angelsächsisch の影響

アングロ=サクソン人伝道 (マインツとフルダ) の領域では、明らかにアングロ=サクソンの伝道の影響を感じさせる、教会語語彙のグループが形成された。ハウブリクス Haubrichs (1987)は、ヴィルヘルム・ブラウネ Wilhelm Braune により提唱され、ハンス・エガースによって改定された、民衆語領域からのアングロ=サクソン語の布教語彙のリスト(以下の8例)が、それほど古高ドイツ語への大きな影響関係を示すものではない、と批判的な見解を示している。³⁴⁾

1. ags. gödspell はラテン語 evangelium 「良き知らせ、福音」の直訳借用語であり、既に古英語では通俗語源説によって、godspell 「神の知らせ」へと意味の改変が生じており、アングロ=サクソンの布教地域では、古高ドイツ語 ahd. gotspell, asächs. godspell と同じ改変が採用された。しかし、南ドイツの cuat chundida 「良き知らせ」 koad aruntporo 「良き知らせ、便り」に対して、また特にフランク語の借用語 evangelio に対して、存続できなかった。ラテン語 evangelium からの翻訳、ahd. gotspell は、ags. gödspell 「良き知らせ、福音」に対応している。翻訳が正確にラテン語から行われていれば、*guotspell もしくは上部ドイツ語で例証があるように、cuat-chundida となっていたはずであった。ahd. gotspell という語形は、古英語に依拠することによって説明が可能となる。古英語では、既に早い時期に gödspell 「良き知らせ」が godspell 「神の知らせ」によって置き換えられていたからである。
2. Lat. 単語族 misericors, misericordia, misereri に対応する ahd. miltherzi, miltida, milten は、古英語の mildheart, miltian の意味での意味論的改変であったが、間もなく南ドイツ語の語彙である irbarmida, barmherzi, armherzi (< got. armahairts)等によって駆逐された。
3. ahd. geba 「恩寵」は、対応する ags. gifu 「施し物、喜捨」からの改変であるが、同化された南ドイツの語彙 gināda によって駆逐された。
4. ahd. ōdmuoti, ōdmuatig, asächs. ōdmōdi (humilitas, humilis)は、aengl. ēadmōd の範例に倣って、元来の「臆病な」の意味から改変された。この語は、フランク族に広く流布し、恐らくこの理由から中世後期になって初めて deomuati によって駆逐された。
5. ahd. heilant; asächs. hēliand, mnl. heiland は、aengl. hœlend = lat. salvator の例に倣って形成されたが、南ドイ

³²⁾ Vgl. Haubrichs, Wolfgang: Die Angelsachsen und die germanischen Stämme des Kontinents im frühen Mittelalter: Sprachliche und literarische Beziehungen. In: Chathain, Próinséas Ní u. Richter, Michael (Hrsg.): *Irland und die Christenheit. Bibelstudien und Mission.* Klett-Cotta, Stuttgart 1987, S. 390; 401f.; Sonderegger, a.a.O., S. 1053.

³³⁾ Vgl. Eggers, a.a.O., S. 167f.; Haubrichs, a.a.O. S. 403; König, a.a.O., S.69.

³⁴⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 403f.

ツの *neriand* 「救済者」, *alem.haltant* 「守る者」に対して貫徹できなかった。

6. *ahd. heilag*, *anfränk. heilig*, *asächs. hēlag* は、古英語 *ags. hālig* からの借用語であり、古高ドイツ語期において、南ドイツの語彙 *wīh* 「聖別された」 (< *got. weihs*) に対して貫徹した。

7. *ahd. der heilago geist* > *spiritus sanctus* における *geist* は、古英語の範例 *gäst* に倣って、「妖怪、超自然的な存在」の意味から改変された。間もなく、誤解を招く南ドイツの語彙 *ätum* > *nhd. Atem* 「息」に対して成功を収めた。

8. *ahd. sunnūnāband* > *nhd. Sonnabend* は、明らかに古英語 *sunnanaefen* 「日曜日前夜、土曜日」の直訳借用であり、*nhd. Samstag* 「土曜日」の名称として、アングロ=サクソン人の全布教地域(西フリジア *Westfriesland*, ザクセン *Sachsen*, ヘッセン *Hessen*, テューリングェン *Thüringen*) 一帯に広がった。明らかに、当初の意味は、「日曜日の前夜の徹夜の祈り」に限定されていた。

これらのアングロ=サクソン人の伝道語彙に共通して見られるのは、その内面化された、深化された敬虔さであると言われている。³⁵⁾しかし、その意味論上の宗教的な深化にもかかわらず、これらの新表現、改変の約半数を少し上回る語彙しか生き延びられなかった。それ以外のアングロ=サクソン語からの借用語を3例挙げる。³⁶⁾

1. *aengl. rōd* 「十字架」 > *asächs. rōda*, *ruoda* (cf. *ahd. ruota* = *virga* 「若枝、鞭」の意味で用いられている。)
2. *asächs. sōd* 「真実」 > *aengl. sōd* 「真実、正義」
3. *asächs. ēncoro* 「隠修士」 > *aengl. āncra* 「隠者」からの借用訳語である。

長期間通用することのなかったアングロ=サクソン語・古英語からの知的語彙を3例挙げておく。³⁷⁾アングロ=サクソン人たちは学識のある知的語彙、神学的な特殊専門語彙や聖書翻訳の言語に影響を与えていた。

1. *ahd. gībet* 「祈り」, *asächs. gībed* > *aengl. gebed* ↔ *ahd. beta* 「依頼、祈り、仲介」
ahd. gībethūs 「祈りの家」 > *aengl. gebedhūs* ↔ *ahd. betahūs*, *betabūr* 「祈りの家」
ahd. gībet 「祈り」 *ahd. gībethūs* 「祈りの家」は、より古い形の *ahd. beta* 「依頼」 *ahd. betahūs*, *betabūr* に反して、古英語の *gebed*, *gebedhūs* に倣って形成された。これらの古高ドイツ語語彙は、フルダ周辺のテキストの最古の例証、即ち『タティアンの調和福音書』 „*Evangelienharmonie des Tatian*“ („*der althochdeutsche Tatian*“) の820/830年に作られた翻訳、フルダ学派のオトフリート・フォン・ヴァイセンブルク *Otfrid von Weisensburg* の『調和福音書』 “*Evangelienharmonie*” (862年)、フルダと接触を持っており、遅くとも840/850年に成立した、『タティアンの調和福音書』からの不完全な翻訳である古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』 “*Heliand*” において見られる。ハウブリクスによれば、この語はかなり後になってから初めて敬虔さを示す語彙として民衆語に取り入れられることとなった。
2. *aengl. frōfregāst* 「慰めの霊」 (*ags. gāst* 「霊、魂」) > *ahd. fluobargeist* 「慰めの霊」

³⁵⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 403f; Sonderegger, a.a.O., S. 1054.

³⁶⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 404.

³⁷⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 404f.

ギリシア・ラテン語源の語 *paracletus* / *paraclitus* 「慰め主、キリスト」は、*aengl. frōfregāst* 「慰めの霊」の規範にならって、独立して『タティアン』の古高ドイツ語の中へ *fluobargeist* 「慰めの霊」として転移された。エガースが指摘しているように、ここでは古英語の語彙の借用が問題となっているのではなく、古英語からの刺激でドイツ語の言語素材から新たに形成されたと言えよう。これらの表現の継承の際に、フルダ修道院の修道士たちが果たした精神的な関与は見誤られるべきではない。

3. 古英語の接尾辞 *-nessi*, *-nissi* の慣習に倣ったフルダ修道院での多くの古高ドイツ語抽象名詞の形成の例:

ahd. finstarnessi > *nhd. Finsternis* 「闇」; *ahd. mihhilnessi* 「偉大さ」

フルダ修道院での最も優れた成果は、院長フラバルス・マウルス *Hrabanus Maurus* の指導下に 9 世紀の 20 年代に成立した『タティアン』の翻訳である。ハウブリクスは、これらのフルダでの造語が 9 世紀初期におけるアングロ=サクソン修道士と地元ドイツの修道士との集中的な議論に基づくと推定しているが、実証的証明には今後の修道院の人物研究が必須であるとするに留まっている。³⁸⁾

2.7 アングロ=サクソン布教の実践テキストの例 — 『ザクセン洗礼誓約』 „*Sächsisches Taufgelöbniß*“ に見られる言語文化接触

マインツに由来する 9 世紀初頭のヴァティカン写本 *Cod. Vat. Pal. lat. 577* (75 葉) は、教会の布教並びに視察目的のための、一種の教会法的・教訓的・礼拝式に関する計 13 のテキスト集成である。第一部は 7 つのテキストから成り、司祭の地位身分と課題を論じている。第二部は、布教に関する 6 つのテキストから成り、その中に『ザクセン洗礼誓約』 „*Sächsisches Taufgelöbniß*“ が含まれている。この洗礼誓約の目的は、ゲルマン信仰および諸宗混交の慣習や、迷信的实践を克服しようとする布教上の戦いであった。洗礼誓約に見られる異端放棄の誓絶の慣用句は、悪魔や一般的な異教の神々だけにでなく、古代ゲルマンの主神たち、トール *Thunær* (*Thor*)、オーディン *Wodan* (*Odin*)、ザクスノート *Saxnot* (古代ゲルマンの戦争神 *ティヴァツ* **Tiwaz*, ツィオ *Zio*) にも向けられていた。ハウブリクス(1987)は、この洗礼誓約とアングロ=サクソン人による 8 世紀末のザクセン布教との明白な関連を指摘し、更に誓絶慣用句の厳密さの中に、ザクセンでの新改宗者たちが実際の放棄 *abrenuntiatio* なしに洗礼される危険があるという、アングロ=サクソン宣教師の憂慮を見ている。³⁹⁾ 当時のザクセン人たちに、古来のゲルマン神からの誓絶や、新しいキリスト教信仰への改宗に対する十分な理解が望めなかったのは当然であろう。従って、宣教師たちが「悪魔からの誓絶」 *'abrenuntiatio diaboli'* の慣用句の中で、ザクセン人たちにはイメージの湧かない悪魔 *diabolus* に対して、ゲルマン諸族の神々と土着の悪霊たちを割り振ることによって、洗礼誓約はより首尾一貫した効果を上げることができたに違いない。その一方で、確実にザクセン人たちは先祖伝来の神々と信仰を喪うこととなったのである。

Forsachistu diabolae? et respondet: ec forsacho diabolae.
end allum diabolgeldē? respondet: end ec forsacho allum
diabolgeldae.

³⁸⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 405.

³⁹⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 396.

end allum dioboles uuercum? respondet: end ec forsacho allum
 dioboles uuercum and uuordum, **Thunaer** ende **Uuoden** ende
Saxnote ende allum them unholdum, the hira genotas sint.
 gelobistu in got alamehtigan fadaer? ec gelobo in got alamehtigan fadaer.
 gelobistu in Crist, godes suno? ec gelobo in Crist, gotes suno. geloubistu in
 halogan gast? ec gelobo in halogan gast.

汝は悪魔を拒むか。するとその者は答える。私は悪魔を拒みますと。
 そして悪魔の偶像の一切を拒むか。するとその者は答える。それから私は
 悪魔の偶像の一切を拒みますと。
 そして全ての悪魔の仕事拒むか。すると彼は答える。それから私は
 全ての悪魔の仕事と言葉、トール、**ヴォーダン** (オーディン)、
ザクスノート (ツィオ) と、彼らの仲間である全ての悪魔たちを拒みますと。
 汝はキリスト、神の息子を信じるか。私はキリスト、神の息子を信じます。
 汝は聖霊を信じるか。私は聖霊を信じます。

この『ザクセン洗礼誓約』 „Sächsisches Taufgelöbnis“には、以下のように古英語と古ザクセン語との間の言語接触 Sprachkontakt ないしは言語干渉 Interferenzen が見られる。⁴⁰⁾

1. ゲルマン神の名前は、古英語の発音と正書法で表記されている。
 asächs.<e>の代わりに<ae> (asächs. Thonar) Thunaer
 [-an]>[-en] (asächs. Uuōdan) Uuōden
 asächs.<hs>の代わりに<x> (asächs. Sahsnote) Saxnote
2. asächs. end, ende と並んで、ae. and も使用されている。
3. 名詞変化は、古代英語のそれと一致する限りにおいて、ザクセン語の形を取る。wercum (複数形・与格)
4. 古ザクセン語複数形語尾-as の代わりに古英語複数形語尾-as を用いる。(asächs. *ginōtos) genōtas
5. 古ザクセン語 1 人称単数現在時制語尾-u の代わりに古英語 1 人称単数現在時制語尾-o を用いる。
 ec forsacho
6. 古ザクセン語接頭辞 gi- の代わりに古英語接頭辞 ge- を用いる。genōtas
7. [ht]の前にある母音[a]の古英語ウムラウト alamehtigan
8. asächs. hēlag gēst の代わりに hālogan gāst における[ā] < ae.[ai]
9. 古英語 diofolgild から類推したハパクス・レゴメノン Hapax legomenon としての diobolgeld
10. ae.[ea, eo, e]の代わりに asächs.[ō] < germ.[au] gelōbo; genōtas
11. ae.[io, ea]の代わりに asächs.[ī] < germ.[ē²] hīra

以上の言語干渉にもかかわらず、この『ザクセン洗礼誓約』は古英語と古ザクセン語の近親性故に 8 世

⁴⁰⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 398f.

紀後半のザクセン人にもある程度言語的に理解できたと推定できるだろう。⁴¹⁾

2.8 9世紀における古英語の聖書文学からの影響

9世紀に至ると、アングロ=サクソン人による大陸ゲルマン民族及び諸語への言語的・文学的影響は急激に減少する。9世紀初頭に成立した『ヴェッソブルンの祈祷』„Wessobrunner Schöpfungshymnus“、9世紀後半の『ムスピリ』„Muspilli“に対する古英語の原典に関する仮説が保持され得なくなったように、830年以降に成立した古ザクセン語聖書文学の予想される原典としてのアングロ=サクソン語聖書叙事詩は、今日まで最終的には文献学的・古文書学的に実証されていない。⁴²⁾『タティアン調和福音書』の不完全な翻訳である古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』は、当然ながら古代ザクセンの貴族を聴衆とする、口承の頭韻詩の伝統を踏まえて構成されている。古高ドイツ語『調和福音書』(862年)の作者オトフリート・フォン・ヴァイセンブルク Otfrid von Weissenburg が、多くのゲルマン諸部族が各自の民衆語で神の賛美を書き記していたことを知っていた事実を、古ザクセン語の著者たちも数年前には周知していたであろう。古ザクセン語の詩人たちが古英語聖書文学をどの程度知っていたかという問題は、古ザクセン語叙事詩『ヘーリアント』と、聖十字架発見の記念を題材としたキュネヴルフ叙事詩『エレーネ』“Elene”との2つの定型表現の類似個所に依存している。⁴³⁾これら定型表現の類似性は偶然とは思われず、どのような間テキスト性や伝承関係が当時存在していたかが問題となる。『ヘーリアント』の写本伝承は850年以降と、ほぼ確定しているのに対し、キュネヴルフ叙事詩の伝承時期に関しては、8世紀後半から9世紀初頭(Irving 1959; Bergner 1986)、10世紀(Hofmann 1958/59)、11世紀初頭(Haubrichs 1987)までと、依然として確定していない。⁴³⁾

⁴¹⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 399.

⁴²⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 406f.; 四反田 想 古代北欧語テキストと中世ドイツ語テキストにおける異文化衝突—ゲルマン的要素とキリスト教的要素の対立—広島独文学会編『広島ドイツ文学』第17号, 2003年, 33-39頁; 同 古代北欧文学と中世ドイツ語文学におけるゲルマン的要素とキリスト教的要素, 原野昇・水田英実・山代宏道・地村彰之・四反田想 著『中世ヨーロッパ文化における多元性』, 溪水社, 2002年, 128-133頁.

⁴³⁾ Vgl. Haubrichs, a.a.O., S. 409; 1. 古英語『エレーネ』“Elene”: 935b-937: him waes halig gast befofen faeste, fyrhat lufu, weallende gewitt þurh witgan snyttro ... (彼に精霊が確実にゆだねられた、火のように熱く、沸き立つような神の愛が預言者の智恵を通して(彼の)知るところとなった); 古ザクセン語『ヘーリアント』„Heliand”: 20b-23: Habda im uualdand god, them helidon an iro herten helagna gest fasto bifolhan endi ferahtan hugi, so manag uuislik uoord endi giuuit mikil ... (支配する神は彼のもとに留まっていた、その戦士に彼らの強さにおいて精霊がしっかりと委ねられた、そして精神が軽んじられ、数多くの人々は賢くなり、多くのことが知られた), 2. 古英語『エレーネ』“Elene”: 1125f: Da waes gebliissod se de to bote gehwearf þurh beam godes, bisceop para leoda ... (そこで彼女は喜んだ、その上神の息子、人々の司教によって満たされた時に、); 古ザクセン語『ヘーリアント』„Heliand”: 4469b-71a: Thar Caiphas uuas, biscop thero liudio. Sie redun tho an that barn godes, huo sie ina asluogin ... (ここではカイファスがいたが、彼は人々の司教であった。彼らはその時その神の子に話しかけた、その時彼らはその子を打ち殺した).

⁴³⁾ Vgl. Irving, E. B.: On the Dating of the Old English Poems ‘Genesis’ and ‘Exodus’, *Anglia* 77, 1959, S. 1-11; Bergner, Heinz (Hrsg.): *Mittelalter*. In: Borgmeier, Raimund (Hrsg.): *Die englische Literatur in Text und Darstellung*. 10 Bde. Band 1. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1986, S. 104 u. 526; Hofmann, D., *Die altsächsische Biblepik ein Ableger der angelsächsischen geistlichen Epik?*. *ZfdA* 89, 1958/59, S. 173-190, neu in: Eichhoff, J./ Rauch, I. (Hrsg.): *Der Heliand*. Darmstadt 1973, S. 315ff.; Haubrichs, a.a.O., S. 409.

3. おわりに

最後に、フランク語-アングロ=サクソン語語彙と南ドイツ語彙（バイエルン語語彙とゴート語語彙）間の関係を一覧表の形でまとめておく。フランク語-アングロ=サクソン語語彙と南ドイツ語彙（バイエルン語語彙とゴート語語彙）間の2グループは、教会語の語彙レベルで多面的な対立関係を形成している。フランク語が一般にアングロ=サクソン語と一致するのに対して、南ドイツ語（上部ドイツ語、特にバイエルン語）はゴート語の語形と一致している。今日のドイツ語では、一部は低地ドイツ語の語形、南ドイツ語の語形が優勢となっている。（なお、表の中で太字の個所の語彙が、後世まで通用することとなった語彙である。）古高ドイツ語に対するラテン語、その他の多くの民衆語からの言語的影響によって、新たな古高ドイツ語の宗教的語彙が成立した。その背後には当然、言語外の文化的・社会的事象や現象の影響も存在した。キリスト教的語彙とゲルマン的語彙は、初期中世において緊迫した対立関係を軸としながらも、多様な様態を取りながら、まさに重層的な言語文化的共生の道を歩んできたと言える。

図表3:

フランク語(アングロ=サクソン語) ラテン語 古高ドイツ語-南ドイツ語 (ゴート語)

geba 「施し」 (as. giefu, gifu)	gratia 「恩寵」	gināda > nhd. Gnade 「恩寵」 (got. anst)
heiland > nhd. Heiland 「救世主」 (as. hælend)	saluator 「救世主」	neriand 「救済者」 (got. nasjands)
ōdmuotī (as. ēadmōd)	humilitas 「謙讓、恭順」	deomuati > nhd. Demut 「謙遜」
miltherzi (as. mildheart)	misericors 「慈悲」	armherzi > nhd. Barmherzigkeit 「慈悲」 (got. armahairts)
geist > nhd. Geist (as. gæst, gāst)	spiritus 「靈」	ātum > nhd. Atem 「息」 (got. ahma)
heilag > nhd. heilig (as. hālig)	sanctus 「聖別された」	wih 「聖なる」 > nhd. Weihe (got. weihs) (Weihnachten < (zu den) wihen nahten)
der heilago geist > der heilige Geist (as. sé hálga gāst)	sanctus spiritus 「聖靈」	wīho ātum

参考文献

Bähr, Dieter: *Abriß der englischen Sprachgeschichte*. Wilhem Fink Verlag, München 2001.

Ders.: *Einführung in das Altenglische*. Wilhem Fink Verlag, München 2001.

Bergner, Heinz (Hrsg.): *Mittelalter*. In: Borgmeier, Raimund (Hrsg.): *Die englische Literatur in Text und Darstellung*. 10 Bde.

- Band 1. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1986.
- Eggers, Hans: *Deutsche Sprachgeschichte*. 2 Bde. Band 1. Das Althochdeutsche und das Mittelhochdeutsche. Rowohlt, Reinbeck bei München 1986.
- Haber, E. / Gröbel, F.: *Mittelateinisches Glossar*. Paderborn 1989.
- Hall, J-R Clark: *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Toronto 1960.
- Haubrichs, Wolfgang: Die Angelsachsen und die germanischen Stämme des Kontinents im frühen Mittelalter: Sprachliche und literarische Beziehungen. In: Chathain, Próinséas Ní u. Richter, Michael (Hrsg.): *Irland und die Christenheit. Bibelstudien und Mission*. Klett-Cotta, Stuttgart 1987, S. 387-412.
- Hofmann, D., Die altsächsische Bibelepik ein Ableger der angelsächsischen geistlichen Epik?. *ZfdA* 89, 1958/59, S. 173-190, neu in: Eichhoff, J./ Rauch, I.(Hrsg.): *Der Heliand*. Darmstadt 1973.
- Irving, E. B.: On the Dating of the Old English Poems 'Genesis' and 'Exodus', *Anglia* 77, 1959, S. 1-11.
- Kluge, Friedrich: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Bearbeitet von Elmar Seebold. 24., durchgesehene und erweiterte Auflage. Berlin / New York 2002.
- Köbler, Gerhard: *Gotisches Wörterbuch*. Leiden 1989.
- König, Werner: *dtv-Atlas zur deutschen Sprache*. München 2001.
- Polenz, Peter von: *Geschichte der deutschen Sprache*. Erweiterte Neubearbeitung der früheren Darstellung von Hans Sperber. 9., überarb. Aufl. Berlin / New York 1978, S. 41-45.
- Reiffenstein, Ingo: *Das Althochdeutsche und die irische Mission im oberdeutschen Raum*. Innsbruck 1958.
- Schmidt, Wilhelm: *Geschichte der deutschen Sprache*. Ein Lehrbuch für das germanistische Studium. 8., völlig überarbeitete Auflage, erarbeitet unter der Leitung von Helmut Langer und Norbert Richard Wolf. Stuttgart / Leipzig 2000.
- Sonderegger, Stefan: Sprachgeschichtliche Aspekte der europäischen Christianisierung. In: Besch, Werner et alii (Hrsg.): *Sprachgeschichte*. 2., vollständig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. 2. Teilband. Walter de Gruyter, Berlin / New York 2000, S. 1030-1061.
- Viereck, Wolfgang / Viereck, Karin / Ramisch, Heinrich: *dtv-Atlas Englische Sprache*. Mit 130 Abbildungen in Farbe. Deutscher Taschenbuch Verlag, 2002 München.
- Wolff, Gerhart: *Deutsche Sprachgeschichte*. Ein Studienbuch. 2., durchgesehene u. aktualisierte Auflage. Tübingen 1990.
- 四反田 想 AlthochdeutschにおけるÜberregionalisierung. 『中世初期および盛期の超地域語生成のあらわれー高地・低地ドイツ語においてー』. 須澤 通・河崎 靖 編 日本独文学会研究叢書010 日本独文学会 2002年, 22-37頁.
- 四反田 想 古代北歐文学と中世ドイツ語文学におけるゲルマン的要素とキリスト教的要素. 原野昇・水田英実・山代宏道・地村彰之・四反田想 著 『中世ヨーロッパ文化における多元性』. 溪水社, 2002年, 119-136頁.
- 四反田 想 古高ドイツ語の宗教的語彙における多文化共生ー古高ドイツ語へのゴート語・古アイルランド語・アングロ=サクソン語の影響関係ー. 原野昇・水田英実・山代宏道・地村彰之・四反田想・大野英志 著 『中世ヨーロッパと多文化共生』. 溪水社, 2003年, 111-146頁.
- 四反田 想 古代北歐語テキストと中世ドイツ語テキストにおける異文化衝突ーゲルマン的要素とキリスト教的要素の対立ー. 広島独文学会編 『広島ドイツ文学』 第17号, 2003年, 27-42頁.

(広島大学大学院文学研究科・助教授)